

## PBLテュートリアルⅡ

科目責任者 小嶋英史  
学年・学期 2学年・3学期

### I. 前 文

PBLテュートリアルでは、問題基盤型学習（problem based learning: PBL）を少人数のグループがテューター（教員）陪席のもとに自主的に学習を行います。

日進月歩の医学・医療技術を習得し、医療に活かすためには医師になってからも常に学び続ける「能動的学習能力」が必要になります。「能動的学習能力」は、課題の中から問題（自分は何がわかっていないのか、あるいは何を知ればいいのか）を自ら抽出できるか、そしてその問題から何を学ぶか、すなわち「問題抽出能力」、「自己学習能力」によって構成されます。そこで、PBLテュートリアルでは、課題より問題を抽出し、その問題を手がかりに学習を進めていくことで「能動的学習能力」を培うこと、すなわち“課題内容を学ぶ”だけでなく、“学び方を学ぶ”ことを目的とします。また、少人数グループでの討議を採用することで、自己学習の成果をわかりやすく伝える「プレゼンテーション能力」の向上、さらには協調性・奉仕の精神といった「医師に必要とされる基本的態度」の習得も目指します。

PBLテュートリアルでは自己学習・グループ討議の成果を最後にまとめて発表します。

### II. 担当教員（テューター担当予定教員）

福島 央之	生理学
伊藤 雅彦	生化学
堀 端 康 博	生化学
佐藤 元 康	生化学
安 戸 博 美	生化学
竹 井 元	薬理学
矢 澤 華 子	病理学
石 井 順	病理学
柏 木 維 人	病理学
布 矢 純 一	微生物学
佐 藤 洋 隆	微生物学
岸 久 司	公衆衛生学
小 松 渡	公衆衛生学
大 高 由 美	総合診療医学
櫻 岡 佑 樹	第二外科学
小 西 泰 介	心臓・血管外科学
前 田 寿美子	呼吸器外科学
鈴木 重 成	眼科学
能 登 慶 和	語学・人文教育部門
廣 田 美 鈴	語学・人文教育部門
馬 籠 信 之	基盤教育部門（化学）
奥 田 竜 也	基盤教育部門（化学）
小嶋 英 史	先端医科学研究センター
内 山 浩 志	研究連携・支援センター
金 子 堅太郎	研究連携・支援センター
堂 前 真理子	研究連携・支援センター
稲 葉 未知世	地域医療教育部門
橋 本 充 代	地域医療教育部門

### Ⅲ. 一般学習目標

課題から問題（自分は何がわかっていないか、何を知ればよいかなど）を抽出し、抽出された問題を解決するために、どの様に自己学習をすれば良いか、“学び方”を学びます。自己学習・グループ討議で学んだことを最後に発表することで「プレゼンテーション能力」の向上に務めます。また、グループでの討議・学習を通じて「協調性・奉仕の精神」の涵養に努めます。

### Ⅳ. 学修の到達目標

- 1 必要な課題を自ら発見できる。
- 2 自分に必要な課題を、重要性・必要性に照らして順位付けできる。
- 3 課題を解決する具体的な方法を発見し、課題を解決できる。
- 4 課題の解決に当たり、他の学修者や教員と協力してより良い解決方法を見出す事が出来る。
- 5 適切な自己評価ができ、改善のための具体的方策を立てる事ができる。
- 6 講義、国内外の教科書・論文、検索情報等の内容について、重要事項や問題点を抽出できる。
- 7 得られた情報を統合し、客観的・批判的に整理して自分の考えをわかりやすく表現できる。
- 8 発表能力を向上することができる。
- 9 コミュニケーションを通じて良好な人間関係を築く事ができる。
- 10 グループの一員としてグループ討議・学習に貢献できる。
- 11 医師としての生涯学習への道筋を作ることができる。

### Ⅴ. 授業計画及び方法 \* ( )内はアクティブラーニングの番号と種類

(1：反転授業の要素を含む授業（知識習得の要素を教室外で済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態。)

2：ディスカッション、ディベート 3：グループワーク 4：実習、フィールドワーク 5：プレゼンテーション  
6：その他)

回数	月	日	曜日	時限	講 義 テ ー マ	担 当 者	アクティブ ラーニング
1	11	1	火	2	オリエンテーション, グループ討議, 自己学習	各 テ ユ ー タ ー	2, 3
2		1	火	3	グループ討議, 自己学習	各 テ ユ ー タ ー	2, 3
3		10	木	2	グループ討議, 自己学習	各 テ ユ ー タ ー	2, 3, 5
4		10	木	3	グループ討議, 自己学習	各 テ ユ ー タ ー	2, 3, 5
5		17	木	2	グループ討議, 自己学習	各 テ ユ ー タ ー	2, 3, 5
6		17	木	3	グループ討議, 自己学習	各 テ ユ ー タ ー	2, 3, 5
7	12	1	木	2	グループ討議, 自己学習	各 テ ユ ー タ ー	2, 3, 5
8		1	木	3	グループ討議, 自己学習	各 テ ユ ー タ ー	2, 3, 5
9		8	木	2	グループ討議, 自己学習及び個人発表準備	各 テ ユ ー タ ー	2, 3, 5
10		8	木	3	グループ討議, 自己学習及び個人発表準備	各 テ ユ ー タ ー	2, 3, 5
11		15	木	2	個人発表	各 テ ユ ー タ ー	2, 5
12		15	木	3	個人発表	各 テ ユ ー タ ー	2, 5

## VI. 評価基準（成績評価の方法・基準）

PBLはその科目の意義から、出席が単位認定の大前提となります。すなわち、病気による欠席など、しかるべき手続きを踏んだ場合を除いて、一切欠席は認めません。

評価は下記の項目により総合評価します。

- 1 テューターによる評価（毎回の自己学習とグループ討議での貢献度）（60%）
- 2 個人発表（に関する資料含む）（20%）
- 3 個人レポート（20%）
- 4 遅刻状況（遅刻は減点の対象とする）
- 5 出席と自己評価の提出（評価をするための必須条件）

## VII. 教科書・参考書・A V資料

特にありません。

## VIII. 質問への対応方法

基本的には、学習時間中に受け付ける。必要に応じて、各グループごとに担当教員と連絡先を確認する。

## IX. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

\*◎：最も重点を置く DP ○：重点を置く DP

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）		
医学知識	人体の構造と機能、種々の疾患の原因や病態などに関する正しい知識に基づいて臨床推論を行い、他者に説明することができる。	
	種々の疾患の診断や治療、予防について原理や特徴を含めて理解し、他者に説明することができる。	
臨床能力	卒後臨床研修において求められる診療技能を身に付け、正しく実践することができる。	
	医療安全や感染防止に配慮した診療を実践することができる。	
プロフェッショナリズム	医師としての良識と倫理観を身に付け、患者やその家族に対して誠意と思いやりのある医療を実践することができる。	
	医師としてのコミュニケーション能力と協調性を身に付け、患者やその家族、あるいは他の医療従事者と適切な人間関係を構築することができる。	
能動的学修能力	医師としての内発的モチベーションに基づいて自己研鑽や生涯学修に努めることができる。	○
	書籍や種々の資料、情報通信技術（ICT）などの利用法を理解し、自らの学修に活用することができる。	◎
リサーチ・マインド	最新の医学情報や医療技術に関心を持ち、専門的議論に参加することができる。	
	自らも医学や医療の進歩に寄与しようとする意欲を持ち、実践することができる。	
社会的視野	保健医療行政の動向や医師に対する社会ニーズを理解し、自らの行動に反映させることができる。	
	医学や医療をグローバルな視点で捉える国際性を身に付け、自らの行動に反映させることができる。	
人間性	医師に求められる幅広い教養を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	○
	多様な価値観に対応できる豊かな人間性を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	○

## X. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

担当テューターから毎回自己学習・グループ討議について評価・講評を受けます。

## XI. 求められる事前学習、事後学習およびそれに必要な時間

事前学習として、毎回抽出された問題に対して十分な自己学習と発表の準備が求められます。（120～分／7日）

## XII. コアカリ記号・番号

A-2-1) ①～⑤（課題探求・解決能力）

A-2-2) ①, ②（学修のあり方）

A-4-1) ②（コミュニケーション）